

## 氏名からみた伝統と近代

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍾, 家新 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/1868">http://hdl.handle.net/10291/1868</a>

# 氏名からみた伝統と近代

鍾 家 新

## はじめに

社会学研究の特徴の一つは研究領域の広さにある。その研究対象は人間自身であり、人間が身をおいた社会である。また、日常生活の諸現象もその重要な領域の一つである。そして、日常生活の諸現象のなかに、言語表現としての命名がある。

一般的にいえば、「姓」は国、民族、地域、特に家族の「継承」であり、名前は親や周りの重要な他者から与えられた「記号」である。したがって、命名は親の欲望を表現するものとして、言語表現の精粹の一つと考えられる。その命名に使われた言葉は頻繁に呼ばれ、使われ、多くの場合、生涯にわたって使われ、本人と一体化する。そして、氏名は自分の外見・身体以外に最も自分を表す記号となり、アイデンティティの一部となる。姓の継承や命名の方法は異なる国・民族では異なり、同じ地域・民族・国でも、時代によって異なる。

日常の言語現象のなかに社会があるとすれば、氏名、特に命名という日常の言語現象から伝統、近代化、同時代の社会変動、親の欲望を読みとることができる。現代社会は管理社会であるため、政府の徴税や徴兵などのために、氏名は国家権力の介入の対象にもなっている。権力による国家管理の欲望は個人の命名にまで浸透してきたのである。

本論文では以上のような社会学な視点から中国と日本の氏名、特に命名という日常の言語現象について分析してみる。この論文によって、中国と日本の伝統・社会変動の相違、中国語と日本語の表現の違い、個人・家族と現代国家との関係を読みとりたい。

## 一 集団のアイデンティティの象徴としての姓

### 1. 姓の由来

中国人の姓は長い歴史をもち、前漢末にすべての中国人が姓をもつようになったといわれている。姓はいろいろな理由・背景から形成された。主につぎの七つの類型がある。①始祖からの姓。例えば、孔、孟、莊。②国名からの姓。例えば、周、梁、魯、越、蔣、宋、魏、呉、齊、楚、陳。③「封地名」からの姓。例えば、閔、楊、劉、白、費、鍾離、鍾。④地方行政区からの姓。例えば、毛、溫、蘇。⑤官職からの姓。例えば、司馬（軍事関係）、司徒（地図と人口関係）、籍（書籍関係）、錢（財政関係）。⑥職業からの姓。例えば、庖（家畜の屠殺関係）、陶（陶工）、匠（職人）<sup>1)</sup>。⑦少数民族の漢民族化に伴う姓の変更。例えば、「賀蘭」から「賀」へ、「屈突」から「屈」、「拓跋」から「元」へ。

私の姓である「鍾」の由来はつぎのとおりである。春秋時代に、晋国の「伯宗」は冤罪で殺害され、彼の息子は楚国の「鍾離」（現在の安徽省鳳陽県）という場所に逃げ込んでいた。そして、彼の子孫は「鍾離」か「鍾」という姓を使うようになった。「鍾」の姓のうち、古代の「鍾子期」の物語はよく知られている。「知音」（＝知己のなかの知己／親友のなかの親友）という漢語がある。その由来は、琴を絶妙に弾く「伯牙」と彼の琴の音をみごとに評価できる「鍾子期」との間の男性の友情物語である。「鍾子期」の死後、「伯牙」は琴を壊し、死ぬまで引かなかったという伝説が残されている。自分の

音楽を評価してくれる「知音」を失ったからである<sup>29)</sup>。他方、伝説のなかに登場する人物で、鬼を退治することができる「鍾馗」も有名である。

「鍾」などのような「姓」は少数者の姓であり、昔は同じ祖先を共有していたと想像する人がいる。しかし、王朝の交替などの社会変動によって、姓の再編も頻繁に行われてきたため、同じ祖先を共有したとは想像しがたい。日本の天皇家は「万世一系」といわれ、姓をもたないという特徴をもつ。これに対して、中国の歴史上の皇帝には封建王朝の交替で姓の入れ替わりがおこった。新王朝の皇帝の姓は有力になり、新王朝づくりに貢献した人々には皇帝が自分の姓を与えるようにしていた。唐朝の皇帝は李という姓であったが、皇帝は「寛大」で、多くの部下に李という姓を与え、同姓を許していた。長い歴史の変遷を経過して、宋朝の時代に編纂された『百家姓』には400余りの姓が収録されている。明朝の時代に編纂された『千家姓』では1,968個の姓が収録されている。現在、中国大陸、台湾では約3,000個の姓が存在すると見られている。人口が多い割には姓の数が少ない。よく使われている姓は約500個である。なかでも、張、王、李、趙、劉、朱、宋、陳、孫は割合と多く使われている姓である。19世紀以後、人口は急増してきたが、姓は増えていない。その背景には祖先、家系、縦の血縁関係を大事にしたいという伝統的な儒教的考えがあるからである。他方、姓を表す漢字の元来の意味はほとんど空洞化し、記号化されている。

## 2. 姓に対する感情

「同姓に対する信頼と異姓に対する不信」という「姓の感情」は、ある種の姓的ナショナリズムである。それは感情的なものであり、理性がきかない領域である。農村地域、特に漢民族の農村地域では、異姓が混じって生活している場合が多い。人数の多い「姓」は「大姓」といい、人数の少ない姓は「小姓」という。ほとんどの場合、「小姓」の人々は「大姓」の人々に圧迫さ

れる。紛争などの主な原因は耕地・山などの境界線、水田水などの社会的資源をめぐる争いである。村の幹部などの選挙の徹底は社会発展の必然的趨勢になっている。理論的には、私も選挙制度の公平性と統治の有効性を高く評価している。しかし、現在の農村の状況をみる限り、選挙の徹底は多数決原理の徹底であるため、その必然的結果として「大姓」の人々が自分と同姓の人間に投票することになる。「小姓」に属する人々には投票されない結果になる可能性が大きい。選挙制度は「大姓」の人々が「小姓」の人々を圧迫するのを正当化する有力な根拠の一つとなる。そこには日本の農村での選挙とは異なる展開がみられるであろう。

武光誠によると、日本「古代の農民は大伴部、日下部などの〈姓〉をもっていたが、のちにそのような姓を失い、鈴木、佐藤といった武士が広めた〈名字〉を代々伝えるようになった。これは、武家支配の成立によって日本が一つにまとまったことを意味するものである。ゆえに、名字の発生は、武士の登場と鎌倉幕府の成立にかかわる日本史上の重要な出来事としてとらえるべきである」<sup>(3)</sup>。

日本における多くの姓の普及は明治維新以後に「人工」的に行われていた。明治期に安い金額で政府から買われた姓もある。日本人には中国人のような姓に対する特殊な感情がみられない。「姓的ナショナリズム」は日本人には弱いと思われる。

### 3. 姓の文字数と氏名の読み方

現在のような「日本人」というアイデンティティの形成は、19世紀以後、特に明治維新以降のことであり、「日本人は中国人や朝鮮人ではない」という区別作業から始まった。そしてその一つがアイデンティティの象徴としての姓の区別であった。中国大陸、台湾、香港、澳門（マカオ）、朝鮮半島などの漢字文化圏でも氏名に漢字を使っている。明治維新以後、日本人を中国

人や朝鮮人たちと区別するために、多くの一文字の姓が二文字に変更された。例えば、古は古島へ、福は福元へ、時は時山へと変更された<sup>4)</sup>。したがって、日本人の姓は「鈴木、田中」などのような二文字が一般的である。ほかの漢字文化圏での姓は一文字が一般的であるので、これで日本人であるかどうかですぐ識別される。北朝鮮や韓国の人々は朝鮮語の読み方を使っているので、同じ一文字でも、読み方が異なる。例えば、「丁さん」、「黄さん」という人は、それぞれ「ちゃんさん」、「ふぁんさん」と表記されるばあいは、北朝鮮や韓国の人々である。それぞれ「ていさん」、「こうさん」と表記されるばあいは、中国系の人々である。

日本の小学校や中学校、高校で、親切的日本人の教師は中国人、韓国人など「日本的な外見」をもつ「外人」の子どもに、「田中太郎」や「佐藤次郎」という類いの日本人氏名の通称を使うかと打診する場合がみられる。理由は中国人、韓国人らしき氏名では学校で差別をうけるおそれがあるからである。実際、実名と違う典型的日本人氏名を通称として使用している「外人」もいる。もちろん、隠すことは差別をさける有効な方法の一つである。しかし、自分を隠しながら日本での学校生活を送ることが、子どもたちのアイデンティティの形成にどう影響するか心配である。明言できることが一つだけあるが、それは、自分を隠して学校生活を送ることは子どもの精神衛生上よくないということである。

#### 4. 「日本人」の条件

伝統的には、〈「日本人」＝「日本的な外見」＋「日本人氏名」＋「純正な日本語」〉という式がある。しかし、グローバル化に伴い、この式が変化している。外国人が日本人との結婚や移住などで日本の国籍を取得する場合がある。「日本的な外見」ではない日本人、例えば、相撲界の風雲児だった小錦、曙などである。「純正な日本語」を話せない日本人、例えば、東南アジアや

東アジアから来た「日本人妻たち」である。しかし、多くの「本物の」日本人は心中では彼らを日本人とは思っていないだろう。特に社会的地位が高くない彼ら、彼女らを出稼ぎ外国人だとみている。2004年、東京で開かれたある学会で、私と一緒に討議の壇上に上がった「本物の」日本人教授が二人いた。フロアの発言者のなかに、「小林〇〇」という氏名があった。「日本人的外見」をもつ「小林〇〇」の「不純な」日本語を聞いた瞬間、その教授は「なーんだ、日本人じゃないじゃないか」と、隣に坐ったもう一人の「本物の」日本人の教授の耳に蔑視の表情で囁いた。彼はかつて私によく「日本の国際化が重要である」と熱く語っていた知識人であった。

## 5. 帰化と氏名の変更

現在の日本人、中国人、韓国人、朝鮮人にとって、一般的に言えば、姓は先天的のものであり、生まれたとき父親の姓を「継承」することになる。しかし、外国の国籍を取得するときは姓の変更がある。

日本の国籍を得て、「日本人」になる場合では、氏名の変更という問題に直面する。変更には三つのやり方がある。一つ目は表記上で「鈴木太郎」、「田中花子」などの日本人の氏名に変更する方法である。二つ目はもとの国と共通の姓を使用する方法である。例えば、中国人の場合では、「林」、「柳」、「司馬」、「秦」が人気がある。というのは中国にも「林」、「柳」、「司馬」、「秦」という姓があるからである。当然、読み方は日本語での「はやし」、「やなぎ」、「しば」になる。三つ目は元の姓の漢字を生かして二文字の姓を使用する方法である。例えば、「王」は「王子」へと変更する。

現在では、姓の変更には強い抵抗をもつ人々が元来の姓の使用を許されている。これに関しては二つの解釈が可能であろう。一つは、日本のグローバル化の進展や外国人の伝統文化への尊重であるという解釈である。もう一つは、日本政府は少子高齢化の対策の一つとして、日本人への「帰化」制限を緩め

たため、「本物の」日本人と区別するために、「帰化」した外国人に外国人的な記号を残すという考え方である。沖縄県の人々の姓は沖縄県以外の日本人とは異なっている。したがって姓によって沖縄人は日本人のなかで特別な日本人として区別されている。

帰化した華僑・華人は微妙な立場にある。「本物の」日本人はかれらを相変わらず中国人としている。日本人になったつもりにもかかわらず、「本物の」日本人の集団には受け入れてもらえない。華僑・華人の人々もかれらを相変わらず華僑・華人としてみるが、ときには「裏切り者」として見ている。まさにサンドイッチの肉のごとく、上と下のパンとはつながっているが上にも下にも入りきれず、あいだに挟まっている状態である。ある華僑は徹底的に日本人になるため、子どもや孫に出身地の状況を一切伝えないようにしている。大人になった孫はルーツを探したいが、彼の祖父に聞いても「覚えていない」という答えしかもらえない。

## 二 命名の中の伝統・近代と欲望

中国で子孫の増加は人間の「成功」の一つの象徴であると考えられてきた。子どもの出生は親の身体の「延長」や家系の継承であり、祖先への孝の遂行である。子どもが生まれると、親が命名をするか、あるいは周辺の有力者や「知識人」に頼んで命名をしてもらう。そこではつぎの諸特徴が見られる。

### 1. 宗族内での地位と「輩名」表記

「宗族」とは共通の「姓」と祖先をもち血縁に基づく親族組織であり、中国、特に中国東南地域の末端にあるインフォーマルな権力組織である。それは中国の伝統的な社会組織として、一般的に、次のような四つの特徴をもつ。

①一定の宗族の規則をもつ。例えば、「同姓不婚」という同じ姓の人々の間

で通婚してはならない規則がある。②公開あるいは非公開の「族長」あるいは「中心人物」がいる。③水田・山などの共同財産をもつ。④姓の由来・宗族の変遷・家系図などを記載している「族譜」をもつ<sup>65</sup>。

中国の伝統的命名法には「輩」（宗族内での世代）を示す命名法がある。この命名法によって異なる「漢字」で「輩」、つまり宗族内での世代間の関係を明確化することができた。「輩」（宗族内での世代）を示す漢字は「輩名」となる。私の「鍾家新」の「家」という漢字は「輩名」になり、私の兄たちはそれぞれ、「鍾家場」、「鍾家群」、「鍾家揚」（故人）という名前である。「〇-〇-抜-元-鴻-家-賢-〇-〇」は異なる「輩」・世代を表す「漢字」である。私の父は「鍾鴻達」、祖父は「鍾元善」、曾祖父は「鍾拔書」という。

「鄧先聖」、「鄧先修」、「鄧先治」という三兄弟の名前の「先」の漢字も「輩」・世代を表すものである。「鄧先聖」は「鄧小平」の本名である。「鄧先聖」は私塾に入塾してから、塾の教員が彼の「先聖」の名は孔子に不敬であると指摘し、彼の父に「希賢」への変更を勧めた。その後、1927年、23歳の時、中国共産党中央の秘書担当になり、秘密を守るために、平凡な「小平」という名に改名された。その後、「小平」が常用され、彼の本名についてはほとんどの中国人が知らない。

「毛沢東」の弟たちは「毛沢民」、「毛沢潭」である。「沢」は「輩名」に当たる。「立→顕→栄→朝→士→文→方→運→際→祥→祖→恩→胎→沢→遠→世→代→永→承→昌」という20字は毛沢東の宗族における異なる世代を表す「漢字」になっている。それらの世代を表す「漢字」は祖先か当時の「文人」によって決められたものである。

「輩名」を示す命名の理由は、大家族という血縁集団のなかでの、あるいはその地域や異なる地域に分散された同姓の人々のなかでの社会的地位、タテ関係を「漢字」で顕在化させるためである。「兄弟数の多少や兄弟間の年齢の間隔の大小」や「親の財産に影響される結婚の年齢の早い晩い」などに

よって、同じ祖父を有す孫世代には、「年齢の格差」が生じ、「玄孫」世代になると、「孫」世代の人より年齢差がさらに開く可能性が大きくなる。年齢が低い「孫」世代の人は年齢が上にある「玄孫」世代の人に「お兄さん」と呼ばれる可能性がある。しかし、世代では年齢が上にある「玄孫」世代の人が年齢が低い「孫」世代の人を「叔父」と呼ぶべきである。私の祖父は四兄弟の末子で、祖父は結婚が遅かった。その祖父の子を父とする私は四兄弟の末子である。小学校のときから、自分より20歳以上も年上の親戚に「叔父」とよく呼ばれ、恥ずかしかった。たまに故郷と一緒に帰省する私の妻も、彼女より20歳以上も年上の人に「叔母」とよく呼ばれていた。宗族の伝統が強い客家の農村では、年齢で人々の上下関係がつけられてきたのではない。「輩」つまり「世代」によって、上下関係が決められてきた。実際の年齢より、「輩」が重要視されているのである。

歴史的には「輩名」の命名法は名門宗族から、一般宗族に普及していた過程がみられる。宗族は伝統中国での基礎集団であった。「輩名」が得られると、集団的繋がり感覚がえられ、宗族での本人の位置づけが明確化される。これらによって、一種の象徴的不死性が得られる。

「輩名」の命名法は農業社会で、人口移動が少ないときに、強い宗族の力を背景に、社会的地位を明確化するという社会的必要性によって存在してきた。1949年以降、社会主義体制の実施、最近20年の近代化、激しい人口移動によって、宗族の力は急減してきた。都会に移住した農村出身者の二世のあいだでは「輩名」の命名法を守る人も急減した。他方、農村では地方政府の官僚制化、警察機構の強化などにより、宗族によって守られる必要性が低くなっている。したがって「輩名」の命名法という伝統に従う人々も年々減ってきている。これは命名の仕方という何千年にも及ぶ「伝統」が最近の20年間で急速に崩壊している一幕を表している。

## 2. 儒教思想と命名におけるジェンダー

日本、朝鮮半島、中国など儒教文化圏では、儒教思想を表すつぎの言葉が名前に使われる場合をよく見かける。これらは恩、孝、忠、義、仁、賢、徳、澤などである。例えば、「毛沢東」、「周恩来」、「朱徳」、「江沢民」。2001年、日本のある大学で「仁義孝」という名前の日本人と出会って、「ペンネームですか」と好奇心で聞いたところ、彼は「いえ、姓は〈仁義〉で、名前は〈孝〉です」と答えた。私はその素晴らしい名前に感動した。「孝」、「忠」などの一文字を入れるだけで、名前が何千年の伝統思想の沈殿を表すことができるのは、漢字の絶妙さの一面であると言わざるをえない。

日本の天皇家は姓と個人名という日本人氏名の一般的な形式をとっていない。しかし、個人名は、明治天皇は「睦仁」、大正天皇は「嘉仁」、昭和天皇は「裕仁」、現在の天皇は「明仁」、現在の皇太子は「文仁」である。「仁」という漢字が共通している。「仁」は元々儒教の道徳思想での中核であり、「忠」と「恕」という両面をもつことを意味している。

田中克彦によれば、「日本をはじめ多くの社会では、生まれてきたこどもの未来を祝って、男ならば武勇、智慧、技芸、徳性などを表わした名を与え、女であれば貞淑さや美しさを表わす名をつける。こうした名は、武、勇、忠、義、孝、節、操など、抽象的で、道徳的、観念的であるが、他に具体的なものの名をつけるものがある。男のばあい、多くは動物であり、女は花や植物の名をつける。松、竹、梅、桜など。(中略) 説教じみた名をつけることはあまりにも直接的で男性原理的で、いっそ、ものに託して表わした方が奥ゆかしいという、日本の美学に即している」<sup>(6)</sup>。

命名にはジェンダーも存在している。男性らしさを表現するため、男性の場合は「偉」、「強」、「勇」、「軍」、「剛」などの漢字、あるいは「龍」、「虎」、「蛟」、「鷹」、などの動物を表示する漢字がよく使われる。例えば、世界的な

男優である「成龍」(=ジャッキー・チェン、本名・陳港生)、賀龍(中国人民解放軍の元帥)、「林彪」(森のなかでの3匹の虎の意味、中国人民解放軍の元帥)、「江騰蛟」(川で飛び上がっている大きな「蛇」の意味、中国人民解放軍幹部、林彪の部下)。

女性らしさを表現するため、女性の場合は「珍」、「麗」、「美」、「香」、「蘭」、「霞」、「玉」、「紅」などの漢字、あるいは「梅」、「桜」など上品な植物を表示する漢字がよく使われる。中国では「梅」、例えば、「紅梅」、「玉梅」、「梅香」などがよく見かける名前で、日本では「桜」、例えば、「桜子」などがよく見かける名前である。

1949年以後、社会主義政策によって、男女平等が唱えられてきた。女性も男性の名前の漢字を多く使うようになった。例えば、「華」、「英」。しかし、ある女性は「勝男」という名前が原因の一つになって、なかなか結婚できなかった。お見合いでも、「男性に勝つ」という「勝男」という名前を聞くだけで、遠慮する人がいた。

### 3. 親の欲望の表現

子どもへの期待を名前に託す。その背景には吉祥文化の影響がある。吉祥言語とは、言葉に「力」が潜んでいると信じられ、その力を生かして良い方向に導いてくれる言語である。祭祀、結婚、占い、葬式、成人式、命名などでよく使われている。例えば、福、禄、寿、喜、吉、安、発、富、などである。

- (1) 健康への欲望。柳田国男の考えによると、名前はつけられた人間に防衛力を付与することができる<sup>7)</sup>。「多産多死」の時代では、乳児の死亡率が高い。老人と同様に乳児には死への親近性がみられる。子どもを元気に育てるために、命名の時、「剛」、「強」、「健」、「康」、「安」などは中国でも日本でも愛用される命名の漢字である。中国の歴史上で、「霍

去病」という名前の人もいた。

- (2) 富への欲望。例えば、「成金、成鑫」、「満金、満鑫」、「富有」、「富漢」などの命名である。一般的に言えば、下層階級で、この類いの命名がよく見られる。現在では、俗すぎと思われる場合が多い。
- (3) 権力への欲望。例えば、「官正」、「国権」、「国英」、「国雄」などの命名である。「毛沢東」の「沢東」は東方に恩沢を与えるようにとの意味がある。「周恩来」の「恩来」は人々に恩をもたらしようにとの意味がある。「胡耀邦」の「耀邦」は国威を発揚できるようにとの意味がある。「江泽民」の「泽民」は人民に恩沢を与えるようにとの意味がある。偶然にも彼らは現代中国の最高権力を得ることになった。これらはたんに歴史の偶然なのであろう、彼らの名前が彼らを権力の座に導いていたとは思えないが。
- (4) 知識への欲望。例えば、「作家」、「卓文」、「文傑」、「文豪」などの命名である。「作家」は私の中学のクラスメートで、「語文」（＝国語）の教員がある日、自習時間に教室で、「作家、作家、あなたの作文は文法にあってないぞ」とからかった。これを聞いた学生たちは思わず笑った。言われた「作家」は勿論赤面していた。この教員は無意識で話したと思うが、「この教員は極めて学生の心理を分からない人だ」と私は思っていた。現代中国でもこういう無神経な教師が増えている。
- (5) 家族の拡大への欲望。中国の農村では、男児には将来の労働力や親の老後の扶養者としての役割が期待されてきた。男の子が多く産まれることは家族拡大の象徴であり、家族発展の基礎である。最初に女の子が産まれた家庭では、長女に「招弟」（＝弟を導いてくる）、「招男」（＝男の子を導いてくる）という名前をつける場合もよくみられる。同様に、日本でも、異性の子どもを祈願するために、子どもに異性の名をつける風習もある。群馬では、次に男児を祈願するとき、産まれた女兒に男児名

をつけ、次に女兒を祈願するとき、産まれた男児に女兒名をつける。「岩手県では、男児がほしい場合、女兒に男名をつけ呼び名とすれば、つきには男児が生まれるとあって、女兒に〈太郎〉〈アンコ（兄）〉とつけた」<sup>(6)</sup>。

中国では「耀祖」,「耀宗」,「耀家」,「家宝」などの命名がよくみられる。客家農村のある人は結婚後七年間も子どもに恵まれなかった。八年目にやっと長男が生まれ、「丁可」と命名した。「丁」は男の子の意味、「可」は「丁」と「口」(=人の意味)で構成されている。「丁可」にはもっと男の子に恵まれるようにとの期待が含まれている。その人はのちに次男、三男にも恵まれた。

- (6) 知能の高い子への欲望。例えば、「聡明」,「天才」,「碩才」,「英才」などの命名である。「聡明」,「天才」,「碩才」は私の高校の同級生の名前で、「英才」は大学の同級生の名前である。中国語の表現は率直に欲望が命名のときに表されている。日本人の命名のとき、「聡」,「聡子」ぐらいの漢字は使うが、「天才」までは使わない。中国人の命名より日本人のそれがより慎ましいといえよう。
- (7) 親自身を表現したい欲望。親の知識の深さを誇示するために、難しい漢字を使用して命名する。例えば、「曄」,「暉」。

現代社会は情報化社会である。子どもの特殊な命名で、親が新聞・テレビに取り上げられることもある。例えば、1994年、日本では子どもの名前を「悪魔」と戸籍登録した件が目され、新聞に取り上げられた。「東京都昭島市在住のX夫婦が子どもの名前を〈悪魔〉とする出生届を提出して受理されたが、後に同市長がこの命名を不適当としていったん記載された〈悪魔〉の文字を誤記を理由に抹消し〈名未定〉とするとともに、X夫婦に対して子の名の追完(ママ)を求めたため、X夫婦がこの命名は戸籍法五〇条の範囲内であること、いったん受理し戸籍に記

載した名を法定の手続きによらないで抹消したのは違法であるとして、子の名の受理手続きの完成を求めた」<sup>9)</sup>。当時、新聞でこの「事件」を知った私は大学院の日本人の友人と「もし「悪魔」で戸籍登録が認められたら、つぎの子が生まれれば、どういう名前で登録するだろう」と話した。そして、「爆弾」ではないかと推測した。「悪魔」という命名事件は日本での命名に関する国家管理の徹底さを物語っている。

中国北京でも、「万」という姓をもつある人が息子に「歳」の名前をつけ、「万歳」(=皇帝)で戸籍登録しようとした。これがインターネット上で取り上げられ、話題になった。周りの説論によって、最終的には「万少一」で妥協したらしい。「一万」歳ではなく「一万に一足りなく、9999」歳でも、結構な地方の「王様」である。昔の中国では、皇帝だけが「万歳」と呼ばれる。これに対して、皇帝より一段下にある王は、「九千歳」、「八千歳」などと呼ばれることがある。

2005年、広州市の戸籍に移籍したある双子のそれぞれの名前は「鍾共」、「鍾央」であった。このことは同じくインターネット上で取り上げられ、注目された。中国語での発音は、それぞれ「中共」(=中国共産党)、「中央」になる。個性的で良い名前だと褒める人もいれば、「中共」、「中央」と同音であることを狙っているので厳粛さが足りないと批判する人もいる。しかし、こういう名前の登録が許されることは、現在中国である程度の表現の自由が許されているもいえよう。

- (8) 記念の欲望。親は子どもの名前を記念のためにつける。この場合、いろいろな命名法がある。夫婦の名前から一文字ずつ採ったり、妻の姓と同音の漢字を使用したりする。例えば、私のある友人は「白」という姓で、彼の妻は「何」という姓である。彼は「何」と同音の「禾」を使用して、子どもに「白嘉禾」の名前をつけた。この名には二重の意味がある。「嘉禾」は優秀な人材という意味である。他方では、「嘉」は「加」

と同音で、「加」にはプラスの意味があり、だからこの名前は「白+何」の意味もある。夫婦への記念にもなる。私はその命名の奥の深さに感服した。

陳という人に一卵性の双子が生まれた。彼はそれぞれの子どもに「d」, 「b」とつけ、陳 d, 陳 bとした。戸籍登録もできた。小文字の「db」はもとは一つの文字であったと仮定して、それが、後に真中から分離させられたとその親は考えていた。そこで「db」は一卵性の双子の名前としてふさわしいと判断した。魯迅の小説「阿 Q 正伝」のなかで、小説の主人公は「阿 Q」である。アルファベットが名前に入る現実の命名はなかった。この意味で、陳 d, 陳 b という名前は画期的である。

- (9) 社会への一体化の欲望。日中戦争や太平洋戦争中、日本人は「昭」, 「勝」, 「勇」, 「満」などの漢字を命名によく用いた。

1949年以後の中華人民共和国の建国後、「国」, 「華」に関連する命名が流行した。例えば、「建国」, 「建華」, 「国慶」, 「振国」, 「国興」, 「興国」, 「志華」, 「愛国」, 「国愛」である。朝鮮戦争勃発後は「援朝」, 「朝勝」, 「衛東」, 「衛国」(朝鮮戦争を支援する)などの命名が多くなった。1966年の「文化大革命」後は、「東」, 「彪」, 「紅」(社会主義の象徴)、「軍」などの命名が多い。例えば「愛東」, 「衛彪」, 「愛紅」, 「紅梅」, 「小紅」, 「学軍」, 「愛軍」などである。「愛東」, 「衛彪」はそれぞれ「毛沢東を愛する」, 「林彪を衛る」という意味である。現在の改革・開放の中国では、「安娜」(中国語で発音すると、「あんな」となる)などの西洋風の名前が増えてきた。

#### 4. 「多名の伝統」と「一名主義」

「字」とは、伝統的中国で本名以外につけられる別名である。『三国演義』での諸葛亮の「字」は孔明である。李白の「字」は「太白」である。

『西遊記』での「猪八戒」の「八戒」も「字」であり、本名は「悟能」である。彼がもし今日パスポートを申請するなら、「猪悟能」になる。一緒にいたかれの「兄貴分」に当たるのは「孫悟空」で、かれの「弟分」に当たる「悟浄」は「沙和尚」とも呼ばれた。三人の名前には共通している「悟」があり、これは彼らが同輩に属することを表している。1978年代の「改革・開放」政策が実施されるまでは孫悟空は中国の民衆の中で圧倒的な人気があった。彼は正義感に溢れ、忠誠心もある。まさに、現代中国共産党員の化身であり、社会主義的人間モデルである。しかし、現在の中国の民衆には、特に若い女性のあいだには「猪八戒」が人気上昇中である。お腹が空いたときは食べる。眠いときは寝る。好きな女性がいたら追いかける。こういう「猪八戒」の姿が理想的な「彼氏」と考える若い女性が多くなっている。猪八戒は改革・開放後の多くの男性の人間像であり、資本主義的人間モデルである。独身傾向さえ見せている孫悟空は人気低下中である。

近代中国の建国の父・孫文の「乳名」（小名、小字）は「帝象」,「号」は逸仙,「字」は「徳明」,学名は「文」である。彼は革命のため、多くの偽名を使用した。例えば、「陳文」,「陳載之」,「高達生」,「中山樵」などである。「中山樵」は日本で使った偽名である。彼にはもともと「中山」の名はないが、「孫」と「中山樵」の「中山」とをあわせて「孫中山」になったので、「孫中山」という名前で見られている。彼を記念するため、彼の故郷・広東省の「香山県」はのちに「中山県」に改名し、現在は「中山市」になっている。広州市に「中山大学」もある。毛沢東の「字」は「詠芝」（潤之に変更、戦前は「李得勝」という偽名も使用）。新中国の建国創立者の一人・朱徳元帥の本名は「代珍」で、学名は「玉階」である<sup>(10)</sup>。これらの本名と学名は一般的な中国人のセンスによれば、やぼったい大衆的なものである。

中国では「乳名」をつける古い伝統がある。小学校に入学するまでは「乳名」で家族・親戚・近隣に呼ばれる。中国農村では、子どもが生まれたとき

の「年」,「月」,「日」,「時」をみて,「金,木,水,火,土」という「五行」が揃っているかどうかを判断し,子どもの運命を占う風習がある。「金,木,水,火,土」という「五行」が揃っている人がよい。足りないときは,「乳名」などの名前で,その字を加えて補っていく。魯迅の「故郷」という小説で「閩土」という登場人物がいる。「彼は〈五行〉で,土が欠けている。従って,彼の父は彼を「閩土」と呼ぶ」<sup>(41)</sup>。

私が生まれたとき,祖父も占い師に頼んで,「五行」で運命を占ってもらった。運命的に「五行」での「火」が足りないと「判明」し,「火」が二ついている漢字「炎」の字と神聖な場所とされた「華光地」の「華」を使用し,「炎華」という「乳名」がつけられ,不足している「火」を補ってもらうためであった。小学校に入学するとき,「鍾家新」という学名を使うようになった。現在でも,帰省すると,客家の親戚・近隣には,「鍾炎華」という「乳名」だったので「炎華哩,阿華」(=華ちゃん)という客家語で呼ばれている。同様に,私の一番上の兄「鍾家場」も同じく「火」が足りないと占い師に「判定」され,「火星」という「乳名」がつけられた。私の二番上の兄「鍾家群」は「水」が足りないと占い師に「判定」され,「潭星」という「乳名」がつけられた。

私の長男・次男の名前は「鍾達豪」,「鍾逸夫」で,彼らの「乳名」は「鍾賢」,「鍾良」である。「鍾」を北京語や客家語でいうと,その発音は「忠」と同じである。「鍾賢」,「鍾良」を呼ぶとき,それぞれ「忠賢」,「忠良」に聞こえる。前述したように,私が8歳の時,病気で亡くなった父の名は「鍾鴻達」というが,一生苦勞した彼を記念するために,長男の命名には彼の名前の「達」を使おうと考えた。他方,同格の義理の父の名「陳岳豪」から「豪」を使って,「達豪」とつけた。この命名法は客家の伝統に違反している。客家の伝統的命名法では,子どもの名前は祖先の名前の漢字を避けなければならない。そして,「乳名」は私の家族の「輩名」の命名法に従い,「賢」を

使い、「賢」と名付け、伝統的客家命名法を守ろうとした。私の家族と中国の親戚たちは彼を「鍾賢」と呼んでいる。

次男が生まれてから、家族や親戚たちに次男の名前を「募集」した。「安東」、「達夫」、「創元」などの案もあったが、最終的にある親戚から提案された「逸夫」を使用することに決めた。その意味は「立身出世」という重い期待をかけないように、おしゃれで気楽に生きてもらうということである。「乳名」はかれの兄・「賢」との間に、兄弟の雰囲気を出すため、中国語で日常的に使われている「賢良」の言葉から「良」ととって「良」と名付けた。うちでは、「リョンリョン」とも呼んでいるため、息子は幼稚園でよく「リョンリョンがほしい」と言い出したりする。幼稚園の先生はその意味を理解できなかった。先生は「逸夫ちゃんがリョンリョンとよくいうがだれのことか」と家内に質問したことがある。説明されても、「どうしていくつも名前もつけるのか」という雰囲気だったらしい。

「乳名」はいろいろな理由や目的からつけられる。誕生してきた子どもの身体状況や「占い師」の予言などが考慮される。極めて身体的に弱い子や「運が悪い」と言われた子には、「石」、「狗」、「賤」などの「乳名」をつけて、手間をかけなくても丈夫に育つようにという希望が託される。毛沢東が生まれる前に、彼の母はすでに二人の子どもを出産していたが、弱かったため、ともに乳児期に死亡した。毛沢東が生まれてから、彼の母は心配で、彼を抱いて近所のあるお寺に行って、一つの大きな石を「幹娘」(＝「義母」として拝み、彼に「石三仔子」(石の三番目の子)という「乳名」をつけた。

魯迅の小説「風波」には、「九斤老太」(＝4500グラムお婆さん)、「七斤」(＝3500グラム)、「七斤嫂」(＝3500グラムお婆さん)と名づけられた人物が登場する。「この村の習慣は少々特別な所がある。女性が子どもを出産してから、好んで子どもの体重をはかり、その体重の重さで「小名」(＝乳名)をつける」<sup>(12)</sup>。魯迅の故郷・紹興周辺の命名風習の一つと推測される。

学名や成人以後の改名等はとくに男性の上層階級や知識人の「特権」であった。下層の大衆や女性は「小名」や乳名を実名とする場合が多かった。大人になると、親、親戚、近隣以外にはその人の「乳名」は知られていない。親しい友人の間で、相手の「乳名」が呼ばれるときは、相互の親しみが示されることになる。しかし、親しくない他人から、自分の「乳名」が呼ばれたときは恥ずかしく感じる場合が多い。喧嘩するとき、相手の「乳名」を呼ぶことは一つの有効的な攻撃法である。

中国では、改名は自由である。『中華人民共和国戸籍登記条例』第18条に改名についての規定がある。18歳以下の場合、親や保護者が戸籍登記機関で手続きをする。18歳以上の場合、本人が戸籍登記機関で手続きをする。

### 三 管理社会と氏名

#### 1. 近代化・国民国家化と氏名管理

19世紀以後、日本、中国など東アジアでは、「自由」や「平等」など聞こえのいいスローガンのもとで、近代化や国民国家化が進んでいる。しかし、それに反する一つの大きな共通点が見られる。それは命名の自由の制限である。例えば、命名として使える漢字の制限がある。

明治政府は1872年5月7日に「復名禁止令——選択的一人一名主義」（大政官布告149号）、同年8月24日に「改名禁止令」（大政官布告235号）を公布した。そして戸籍の編成が行われていたとき、近代日本での一人一名主義の原則が確立された。登録後の改名は役所や家庭裁判所の判断が必要であるとし、簡単にはできなくなった。従来の多名主義は禁止され、一人一名主義の原則は人口数の把握、徴兵、徴税、教育などの国家管理に役立ってきた。日本の近代の過程は多名主義から一名主義への徹底化の過程であり、国家権力は個人の命名権や名前の変化の権利を制限するものといえる。

日本の戸籍法は、命名のとき「常用平易な文字」を用いると決めた。使える漢字は〈常用漢字 1945 字〉と法務省令に定められた〈人名用漢字 290 字〉である。日本では戸籍管理が厳しく、役人も法に極めて忠実である。したがって人名用漢字以外の命名による出生届は拒否される。2002 年 12 月 9 日、テレビ番組「ジカダンパン」（テレビ東京）には、人名用漢字にない字で命名し、子どもの出生届が市町村の窓口で拒否された親たちが出演していた。例として上げられたのは、「莓」、「舵」、「雫」などであった。2004 年 7 月、人名 578 字の追加が話題になった。これは戸籍法での「常用平易な文字」という決まりが日本人の命名を制限し、人名用漢字が足りないことを表している。1978 年、日本は JIS（日本工業規格）漢字コード第一水準と第二水準を制定した。使用頻度が高い漢字が第一水準とされ、それ以外が第二水準とされた。2000 年、第三、四水準が追加された。現在話題になっている人名漢字の追加は第一水準の漢字を最優先にしている。

「常用平易な文字」の範囲内の「常識」的な漢字を使って「常識」を超えた人名をつけ市町村窓口の職員たちや周囲の人々に拒否される場合もありうる。日本での「悪魔」の命名の件は、前述のとおり子どもの親の表現の欲望という観点から分析したが、他方では、子どもの親の日本という「管理社会」への挑戦であったかもしれない。田中克彦はつぎのように述べた。「日本ではかつて大杉栄が自分の娘に魔子という、考えようによっては可愛らしい名前をつけたが、現代日本では、男の子に悪魔と名づけようとしたために裁判所までが介入するさわぎとなった。この名づけをおさえつけたのは権力ではなくて、普通の人たちであった。私のまわりにいる、思想や政治の面でびっくりするような過激な人が、びっくりするような熱心さで、悪魔くんの名を非難したことで私は驚いてしまったのである」<sup>(13)</sup>。

現在まで、中国では人名用漢字を制限しなかった。1990 年代の初め、漢字学術討論会で、人名用漢字を制限しようという案があったが、多くの研究

者に反対された。現在では、それを12000字に制限しようという案が有力になっている。制限しなければならぬ理由として、分かりやすい人名は他人や社会に便利であるという他人本位の考えである。難しい漢字を使用すると、同級生が読めないだけでなく、教師も読めない。パソコンで入力するとき、読み方がわからないので時間がかかる。人名用漢字を制限することは避けられない潮流になっている。

## 2. 同姓同名とアイデンティティの弱体化

冒頭で述べたように、氏名は自分の外見・身体以外に最も自分を表す記号であり、アイデンティティの一部である。人口は増加する一方であり、しかし、儒教の考えの影響で姓の変更が少ないことや、好む字の傾向が似てくることのため、「同姓同名」が必然的に多くなっていく。他方、情報社会になり、他人指向の流行が起こりやすくなっている。個性を見せるつもりで、タレントなどの名前を真似する。結果的には同姓同名が起こり、没個性的になる。例えば、男性では「李偉」、「張強」、女性では「王敏」という名前の人が極めて多い。犯罪が起こったとき、同姓同名が多い場合は公安局にとっても犯人を摘発しにくくなる。楊揚の調べによると、北京市の1993～94年の電話帳と1995～96年のそれとを比較してみると、前の電話帳では、「王軍」34人、「張軍」34人、「王建国」35人である。これに対して後の電話帳では、「王軍」45人、「張軍」49人、「王建国」48人である<sup>(14)</sup>。

人口移動によって、自分と同姓同名の人と出会う確率も高くなる。これは個人の個性の喪失につながり、アイデンティティの確立に不利である。私の「鍾家新」の「鍾」という姓は少なく、「家新」の名前も少なく、同姓同名と出逢ったことはなかった。ある日インターネット上に簡体字で「鍾家新」と入力すると、山東省のある医療用品の販売店の責任者が「鍾家新」であることがわかった。「同姓同名」の人と初めて「出逢った」妙な感じであった。当

時、ふともう一人の「鍾家新」と一度会ってみたくなったものだった。

戸籍制度以外に、中国で人口移動を管理する「身分証」(IDカード)の制度が実施されている。16歳以上の中国公民には「身分証」が作られるようになった。同姓同名の問題も権力側に注目されている。

社会生活では、日本人の氏名は姓のみが読まれることがほとんどである。「鈴木太郎」なら、「鈴木」という姓のみが声で呼ばれる。一個人より、まるで「鈴木家」の一員として社会参加をしているようである。これは穂積陳重がいう日本での実名を忌避する風習<sup>(15)</sup>の影響よりも、「実名を呼ぶのはなれなれしすぎる」という日本人の美学によるものである。同じ学校や職場で、何名かの「鈴木」がいる可能性もある。このばあい、一種の日本式の「同名」の感覚が与えられる。中国人の氏名は姓と名を一緒に読む場合が一般的である。一個人としてみられている。日本人の名は日常生活において中国人の名ほど使われていない。

### 3. 同姓同名の対策

日本政府は明治期から、同姓同名への対策をとっていた。「近代以前の日本社会では、かなり同名者が多かったことが宗門人別帳の分析などから指摘されているが、明治政府は大胆な名前の近代化政策を断行した。明治政府の名前政策の基本原理のひとつは、名前の個人特定機能の向上にあり、これをもって徴兵、徴税、教育の円滑化をめざした。全国民に名字を名乗らせることを促進するとともに、一度戸籍に登録した名前は原則として改名禁止としながら、同姓同名者に対しては大幅に改名を認めたのは、この原理にもとづくものであった」<sup>(16)</sup>。

人口大国の中国では、人名用漢字を制限すれば、同姓同名が増えるのは避けられない。日本人の氏名は、二文字以上の「復姓」があるため、同姓同名が相対的に中国人より少ない。

これは中国での同姓同名の対策にヒントを与えている。つぎの諸対策が考えられる。

- (1) 祖先の名を姓とする。例えば、「鍾」は彼らの祖先の「伯宗」を姓にする。
- (2) 子どもは父母の姓を姓とする。例えば、父が「楊」、母が「劉」の場合、子どもの姓は「楊劉」になり、父が「劉」、母が「楊」の場合は「劉楊」になる。漢民族では「同姓不婚」（同姓の男女が結婚を避ける）という習慣があって、同姓結婚は少ない。同姓結婚では父が「張」、母も「張」の場合、子どもの姓は「張張」になる。しかし、1990年代以後、少しずつ増えてきた。その一つの背景は一人っ子政策の実施で、妻側も自分の姓を残したいからである。
- (3) 元の姓に復元する。例えば、「賀」は「賀蘭」へ、「屈」は「屈突」へ、「元」は「拓跋」へと復元する。
- (4) 少数民族と結婚した場合は少数民族の姓を使用する。例えば、「楊」という男性が「愛新覚羅」という満州族の人と結婚した場合、子どもの姓は「愛新覚羅」になる。
- (5) 父母の姓を踏襲せず、四文字の名前を作る感覚で命名をする。例えば、「白雲千里」、「青山流水」などのような名前である。

儒教は文化であり、考え方の一種である。「家系」を大事にし、「姓」の連続を表している。姓はその本人のアイデンティティであり、家族のアイデンティティである。このような伝統が完全に廃止されない限り、上で提案した姓の変更は不可能である。

#### 4. 婚姻変化と姓の変更

日本人の氏名の変更に関する管理は厳しい。殺人など重い犯罪を犯した少年は社会復帰のために氏名の変更が許される。養子・養女になることや結婚・

離婚では姓の変更も許される。日本では結婚による姓の変更は一般的である。

中国では、「同姓不婚」（同じ「姓」の人々の間で通婚してはいけない）という考え・習慣があった。これは共通の祖先をもつ血縁は親戚同士と考えられているからである。明らかに血縁関係がない場合、その限りではない。異姓の男性と結婚したあとの女性はもとの姓のまま「同姓化」しない。死ぬまで「外姓人」=異なる姓の人である。日本では「同姓」夫婦が一般的とはじめて知ったとき、驚いた。のちに、結婚した女性が夫の姓に変更するという「習慣」を知った。私と同じく女性の姓が変更する場合は、結婚であると思いきこんでいる外国人は多い。ある外国人が同僚の姓の変更を知り、「おめでとう」と率直に言った。彼は言われた女性に睨まれた。彼はその原因をほかの同僚に聞いた。そしてその女性は離婚で元の姓に復元したのだとわかった。私の妻は「陳」という姓である。長男が小学校に在学したとき、私の妻は同級生の何人かの親に、「何かあったのか、〈鍾〉でなく〈陳〉の姓を名乗っているのは」と〈親切に〉聞かれたことがある。「中国では夫婦別姓である」というと、「そうなんですか。それでよかった」と納得された。妻の姓が夫と異なるのをみて、離婚でもしたのではないかと推測したようである。中国人は「同姓不婚」の視点で日本の夫婦をみ、日本人は「夫婦同姓」の視点で中国の夫婦をみる。多くの日常の場面で、人間は自文化中心主義に陥りやすい。

なぜ結婚した女性が夫の姓に変更するという「習慣」があるのか。明確な理由は不明である。日本人に聞くと、「家族全員が同じ姓で、妻・母だけが異姓である場合、家族の一体感がない」という答えが多い。これは表記上での「純粋性、同質性」を求める、日本家族の強い排他傾向を表している。日本の女性解放運動に従事する人々は夫婦同姓が一つの性差別であるとして、それに反対し、夫婦別姓を主張している。しかし、性差別の要因は、形式的な姓の異同より、現実の伝統的文化や社会制度にあると思われる。儒教文化

圏の家族は排他性が強く、外来者＝嫁を受け入れるためには時間がかかると推測される。

中国では、個人用か夫婦用の墓はあるが、家族全員が入る「二世帯・三世帯の墓」はない。日本では家族全員が入る「二世帯・三世帯の墓」がある。しかし、同姓者であるという条件がある。結婚で改姓した娘が離婚などで、実家に戻った場合、異姓の娘と孫は元の姓に復元しないと、親の墓に入れてもらえない。もし、娘が事故で亡くなった場合、孫は行政の手続きをして「養子」「養女」にしないと、母親の実家の墓に入れられない。明らかに、家族・死などについて、日本人と中国人との理解が異なる。姓の変更に対する行政管理は中国政府より日本政府のほうが厳格である。

## 5. 氏名の物体化としての印鑑

印鑑はもともとアジア的共同体の職制とする部族の標識を起源とし、官印に発達したものである。私印というのも伝統的中國の政治社会における職制としての意味をもつ家や家柄を表すものである。

赤い朱肉は「血」を象徴し、掘られた氏名は指紋・本人の象徴である。捺印は「血印」を象徴し、契約・盟約の認定を示す。「血印」とは、指を噛んで、少々血をにじませた指を押すことを指す。伝統中国で、重大な契約を結ぶときに使われる。

中国社会では秘密結社の伝統がある。近代の有名な秘密結社として「天地会」「洪門会」がある。清王朝を打倒した「中国国民党」や社会主義中国を造った「中国共産党」も秘密結社から出発し発展していった。秘密結社に「入会」のとき、秘密保守などの約束を誓うため、いろいろな儀式があるが、その一つは「血印」を押すことである。1978年、安徽省鳳陽県のある村の幹部は当時農村での集団生産体制の生産性が極めて低いため、農村の飢餓を解決できないと痛感し、各農家に「分田到戸」（分担税金を課し、土地を分

ける)を実施することを決心した。当時の社会主義体制ではこれは国家権力に対する挑戦行為であり、逮捕・処刑される可能性があった。「分田到戸」の契約書にその村の幹部は「血印」を押した。そして彼の友人につきのことを頼んだ。「もし私がこれで逮捕・処刑された場合、私の子どもを18歳まで育てて下さい」<sup>(17)</sup>。彼の勇気ある決断は安徽省人民政府に許され、その後の農村改革の草分けの歴史的出来事となった。

現在の中国では公的機関が書類を発行するとき、印鑑が使われているが、民衆の日常生活ではあまり使われなくなった。一般的に中国政府や公的機関の公印は楕円形や円形が多く、私印は四角である。一般の中国民衆にとって印鑑は書道のような芸術の領域に属するようになった。

これに対して、現在の日本では公的機関が書類を発行するときも、もちろん印鑑が使われているが、民衆の日常生活でも印鑑は必需品である。実印・認印など使い分けをしている。日本政府・公的機関の公印は四角が多い、私印は楕円形か円形である。出勤簿の捺印などは「姓」のみで済まされている。忘れたときは、同じ姓の人の印鑑を借りることもしばしばある。他方では、印鑑の登録も行われ、役所は印鑑登録カードも発行している。住宅の購入などのときは、印鑑証明書や実印が必要とされる。実に面倒なことである。こういう面倒さこそ、現代日本の管理社会の手法の一つである。日本は印鑑社会である。

## おわりに

第二次世界大戦中、ナチスドイツは収容施設に収容されたユダヤ人の氏名を消し、手に番号の烙印を押していた。それによってユダヤ人の個性を抹殺しようとしたのである。氏名は人間のアイデンティティそのものである。

氏名は個人と社会的関係との媒介である。氏名には社会的関係の一部が示

されている。中国の漢民族の氏名をみると、姓は大家族のアイデンティティの記号である。「輩名」の「漢字」は血縁集団の世代のアイデンティティの記号である。最後の名の漢字は自分を表している。しかし、村を離れてよその地域に移住すると、「輩名」の命名法としての「漢字」は世代を表記する意味がなくなる。

明治維新前の日本人の多名主義と中国での多名主義についてみると、一つの氏名がその人のアイデンティティであるという現代風の解釈は通用しない。多名主義は人間のアイデンティティの多様性を表している。アイデンティティは固定されたものではなく、変化の過程である。改名は新しいアイデンティティを求めたい欲望を意味する。

一般的に言えば、子どもに期待をかけることは多くの人間の自然な気持ちの表れである。命名には親の多くの欲望が含まれている。

日本の夫婦別姓に反対する有力な論拠の一つは夫婦同姓が日本の伝統だからである。これはあきらかに承服しがたい言い分の一つである。日本より中国の姓の歴史が古く、まさに古い伝統の一側面である。これに対して、日本の姓は明治以後に普及したものであり、近代以後に創られた伝統の一つである。夫婦同姓も当然近代以後に創られた伝統の一つになる。

近代化が先に進んだ明治以後の日本政府は「一名主義」を徹底し、個人の氏名を国家管理の重要な一部とした。これに対して、中国では「多名主義」が継続してきた。中国での「輩名」の命名法の衰退は、個人主義の浸透の結果として理解される。

《注》

- (1) 劉宗迪『姓氏名号面面觀』齊魯書社（中国）、2000年、40～55ページ。
- (2) 徐海榮『三字經・百家姓・千字文』華夏出版社（中国）、2002年、228ページ。
- (3) 武光誠『名字と日本人』文藝春秋、1988年、24ページ。
- (4) 武光誠、前掲書、24ページ。

- (5) 鍾家新『中国民衆の欲望のゆくえ』新曜社, 1999年, 140ページ。
- (6) 田中克彦『名前と人間』岩波新書, 1996年, 183~184ページ。
- (7) 『定本柳田国男集15』筑摩書房, 1963年, 205~233ページ。
- (8) 上野和男・森謙二編『名前と社会—名づけの社会史』早稲田大学出版部, 1999年, 13ページ。
- (9) 上野和男・森謙二, 前掲書, 111~112ページ。
- (10) 徐健順, 辛憲編『命名—中国姓名文化的奥妙』中国書店(中国), 1999年, 468ページ。
- (11) 『魯迅選集』(第一巻)人民文学出版社(中国), 1995年, 60ページ。
- (12) 『魯迅選集』(第一巻)人民文学出版社(中国), 1995年, 49ページ。
- (13) 田中克彦, 前掲書, 194ページ。
- (14) 楊揚『漢語人名文化放談』新華出版社(中国), 2004年, 75ページ。
- (15) 日本での実名を忌避する風習について穂積陳重のつぎの著作が詳しい。穂積陳重『實名敬避俗研究』刀江書院, 1926年。
- (16) 上野和男・森謙二, 前掲書, 11~12ページ。
- (17) 莫增斌・高衛東・陳艾農編『大変革時代』内蒙古人民出版社(中国), 1996年, 151ページ。